

大学院看護学研究科看護学専攻	
学籍番号	DN1502
氏 名	島田 裕子
学位の種類	博士（看護学）
学位授与年月日	2020 年 3 月 16 日
学位授与の要件	学位規程第 4 条第 2 項該当
論文題目	原子力災害により余儀なく移住した被災者の生活の再構築 — 成人男性に焦点を当てて —
主指導教員	春山 早苗 教授
副指導教員	大塚 公一郎 教授
	半澤 節子 教授
論文審査委員	主査： 本田 芳香 教授
	副査： 春山 早苗 教授
	副査： 横山 由美 教授

最終試験の結果の要旨

1) 研究テーマの目的の明確性および広域実践看護学分野の目的との適合性

本研究の目的は、原子力災害により余儀なく移住した被災者、なかでも成人男性に焦点をあてて生活の再構築とその促進要因と阻害要因を明らかにし、原子力災害により移住した被災者の生活の再構築を促進する、被災自治体及び移住先自治体の保健師の役割と活動について検討することであり、目的は明確である。1 月 6 日の審査では、用語の定義と研究テーマ及び研究目的に齟齬があったため適切な記述を求め、1 月 22 日の審査では適切に記述されていた。本研究により、福島第一原発事故のような未曾有の大規模災害時に地域保健医療が直面する複合した課題、そこに暮らす住民が自治体を超えて長期にわたり移住を余儀なくされることに伴う様々なヘルスケアニーズに対し、被災自治体及び移住先自治体の保健師の支援およびその支援体制の構築への寄与が期待でき、広域実践看護学分野の目的に適合している。

2) 研究の独創性・革新性

本研究は、福島第一原発の大規模災害により被災した人々、特に家族の中で中心的役割を

担う成人男性を対象に、ライフ・ライン・メソッドを用い、原発事故より8年間にわたる被災者の生活の軌跡を質的研究により明らかにしたという点において新規性・独創性がある。また原子力災害により余儀なく移住した人々の理解および具体的な看護支援のあり方の検討に役立つ点からも、研究の有用性・革新性が認められる。

3) 実践的意義・社会的意義

本研究の結果は、今後長期的かつ自治体を超えた広域的な避難や移住を要する大規模災害発生時における被災者への具体的な支援のあり方、被災自治体と移住先自治体の保健師が担う役割や活動方法、および支援体制づくりに寄与する実践的意義がある。また、長期かつ広域的な避難を余儀なくされた被災者の生活の再構築の促進及び大規模災害被災者の健康を守り続けることに寄与する社会的意義がある。

4) 研究方法の妥当性

本研究は、ライフ・ヒストリー研究の一方法であるライフ・ライン・メソッドと半構成的面接法を用いた質的記述的研究法である。ライフ・ライン・メソッドにより感情レベルの高低を可視化することは、原発事故の危機的状況や困難な状況を含む出来事を振り返り、それを価値化する研究方法として妥当である。またライフ・ラインを通して、各期で経験した出来事を研究者と共有することは、8年間という長きにわたる被災者の生活をより深く把握するための研究方法としても妥当である。論文審査で指摘した分析方法については、最終試験では丁寧に記述されており、改善されていた。

5) 引用文献の適切性

引用文献の適切性はある、論文審査で指摘した記載方法は改善されていた。

6) 論文の体系、論旨の一貫性

本研究は、Meleisの移行理論を基盤に、原子力災害による移住環境の変化より3つの時期に分類し、被災者の生活状況の移行を内的プロセスとして明らかにしている。これら理論的基盤及び概念分析の結果より研究枠組みを構築したことは、論文体系の一貫性がある。論文審査で指摘した生活の再構築と影響要因に関する結果の記述については修正され、研究目的に沿って目的、方法、結果、考察において論旨の一貫性は確保されていた。最終試験では、事例毎の結果により、研究目的に沿って考察はされていたが、影響要因の表記についてより精練が必要であるとの指摘があったが、最終論文で修正された。

以上、博士論文の審査基準を満たしていることから、最終試験は合格と判定した。